

ある。是非一読を乞う。

(四六判 四八七頁 一九七八年五月)

みずす書房 六〇〇〇円)

(南川高志 京都大学大学院生)

上智大学イペロ

アメリカ研究所発行

『イペロアメリカ研究』

創刊号

近年、日本のラテンアメリカ研究の発展には、めざましいものがある。たとえば、一九七九年三月には『歴史学研究』においてはじめて「ラテンアメリカ近現代史の諸問題」小特集が生まれ、また一九八〇年六月には、歴史をはじめあらゆる研究領域を網羅する「ラテンアメリカ学会」の発足が予定されている。そして一九七九年七月には、待望久しいラテンアメリカ専門誌『イペロアメリカ研究』(年二回発行)が、上智大学イペロアメリカ研究所の手によって創刊された。本誌六一巻四号において紹介した『LA研究』(季刊)がこれまでほとんど唯一のラテンアメリカ専門誌だっただ

けに、この刊行のもつ意味は大きい。

ところで創刊号は、左記のとおり、四篇の研究論文、二篇の研究ノート、資料欄および研究所ニュースから構成されている。

グスタボ・アンドラーデ著「一九七〇

年代ラテンアメリカ政治の新しい潮流

——軍部・教会・カーター外交——」

水野一著「一九七〇年代のラテンアメリカ経済——その変化と問題点——」

Celso Furtado, "Causes and Con-

sequences of the Brazilian Economic

Miracle: Negative Aspects of the Mod-

ern" (フルタード著「ブラジルの経済的

奇蹟の原因と結果——そのマイナスの側面——)」

エラルド・ムニョス著、辻豊治訳、「従

属——帝国主義論争における変化と連続性(一)」

三橋利光著「メキシコ革命前の中産階

級の位置づけ——ポルフィリオ期を中心として——」(研究ノート)

二村久則著「ラテンアメリカの反米思

想——マルティとロドーに関する若干の

考察——」(研究ノート)

〈資料〉日墨共同声明(一九七八年一

月二日付)

〈資料〉日経新聞に掲載されたエルサ

ルバドル・ゲリラの声明

〈資料〉日本—ラテンアメリカ関係日

誌(一九七八年)

この目次ほど、同誌の性格を端的に表わすものはないだろう。第一に、研究論文に限られないその構成からは、同誌がラテンアメリカに関する総合的な情報誌をめざそうとしていることが見てとれる。そして三篇の論文、すなわちアンドラーデ論文、水野論文およびフルタード論文が研究所主催のラテンアメリカ事情公開講座における報告論文であるという事実は、同誌が「開かれた研究誌」をめざしていることを示すとともに、この創刊が着実な日常活動の所産であることを明らかにしている。

個々の論文の内容に立ちいる紙幅の余裕はないが、気鋭の研究ノート二篇に触れることにする。

まず二村論文は、アメリカ帝国主義成立

期の反米思想を、キューバのホセ・マルティとウルグアイのホセ・エンリケ・ロドリーを対比させながら、手際よく叙述したものである。同氏によれば、エリート主義的で観念的なロドリーの反米思想にたいして、マルティのそれは、生活体験に裏打ちされ、一般民衆に根ざすものであった。

もう一篇の研究ノートである三橋論文は、メキシコ近現代史を専攻する評者にとって、もともと示唆に富むものであった。三橋論文は、メキシコ中産階級の起源・発展を一九一〇年代のメキシコ革命以降に求める通説に正当にも疑問を提起し、これまでの研究成果の整理・統合をこころみつつ、「現在との関連でメキシコ中産階級を分析するためには、ポルフィリオ期（一八七七—一九一一年）以降のその形成と発展を考慮すればよく、それ以前におけるメキシコ中産階級については、ほとんど重要性を持たないであろう」という暫定的結論に到達する。

ただ評者にとって疑問に残るのは、三橋論文が「中産階級」を「階級」概念として

扱っているのか、それとも「社会階層」概念としてとり扱おうとしているのか、必ずしも明確とはいえない点がある。「社会セクター」という用語の併用とともに、気にかかった。もう一点は、ポルフィリオ期以前を切り捨てうるのかどうか、というためらひを感じる。一九世紀メキシコ史研究の重点がポルフィリオ期からそれ以前の時期に移行したとせば、Ciro F. S. Cardoso ed., *Formación y desarrollo de la burguesía en México: Siglo XIX* (México: Siglo XXI, 1978) 『メキシコのブルジョアジーの形成と発展』のような成果が生まれつつある今日、さらなる考察が必要なのではないだろうか。

ともあれ、『E.A.研究』発行にたずさわる一人として、『イベロアメリカ研究』の今後の発展に期待したい。

(B5判 一〇〇頁 一九七九年七月刊
上智大学イベロアメリカ研究所
年間購読料二四〇〇円)

(青木芳夫 奈良大学講師)

Daniel T. Rodgers,

*The Work Ethic in
Industrial America
1850-1920*

明確で緻密な分析力と流麗な文章で書かれた本書は、思想史が最も活力を帯び、有効となるどころ、即ち、思想が現実と切り結ぶ接点に焦点を合わせ、産業革命に直面した伝統的労働倫理という理念の行方を追求した思想史の傑作である。

著者によれば、一九世紀中葉の合衆国北部において受容されていた労働倫理は、工場制と固定した賃金労働者階級を基礎とする経済よりも古く、又、それとは明白に異なった、前産業資本主義的経済に基づいたものであった。それは、有用性、自己抑制、成功の夢、そして創造性の四つの要素から構成されていた。即ち、労働は、経済的欠乏の世にあって人々を有用にし、怠惰が生み出す疑惑と誘惑を払拭し、努力に応じた富と地位への道を拓くものであった。さらに、労働は、人間がその知力と熟練技能を